

環境問題解決の「共創」に向けて対話の力を

枝廣淳子氏

(環境ジャーナリスト、
ユース代表取締役)

聞き手 編集主幹・根津義明

同時通訳に目標を定め 二年で実現

——枝廣さんは環境ジャーナリストとして
ご活躍され、資源エネルギー庁の基本問題
委員会委員として「エネルギー基本計画」
策定に向けてのご提言もされています。そ
こに至る段階で、普通の主婦から同時通訳
になられたという経歴が興味深いですね。

枝廣 二十九歳のとき、たまたま夫が転勤で
アメリカに二年行くことが決まりました。ま
だ一歳にもならない子どもがいたので、外で
何かすることはできないだろうけど、せっか
く行くのだから何か身につけて帰ってきたい
何がいかと考えて、ずっと苦手意識があつ
た英語を勉強することにしたのです。期間が
限られているので、二年後に到達したいとこ

ろはどこかをまず考え、日本に帰るときには
同時通訳ができるようになっていたいという
目標、ビジョンを最初に決めたのです。

では、そのためには何をしたらいいのかを
少しずつ落とし込んでいって、今日は何を勉
強したらいい、明日は何を……と決めて一生
懸命勉強した結果、日本に帰ってから通訳の
仕事ができるようになりました。そのような
自分の経験もありますので、将来から現在を
振り返る「バックキャストイング」という方
法について、あちこちでお話しています。

会社もそうでしょうけど、どうしても目の
前のことばかり一生懸命になりすぎるあまり、
それ以外のことがなかなか考えられず、前に
進めなくなります。そうならないためには、
現状がどうか、どういう問題に直面している
かはひとまず置いておいて、すべてが思い通
りいっただらうなるかと、かなえない究極の

目標、理想の姿をまず描きます。その理想像
から現状を振り返り、そこに到達するには何
をすべきかを考えていくわけです。

——そのビジョニングでは、いかに綿密に
なるべき姿を描くかが鍵ですね。

枝廣 そうです。努力を続けていかなければ
ならない局面で、ビジョンは、すごく引っ張
ってくれます。ただ、ビジョンは、やはり現
状から遠いのですね。今日、明日頑張れば到
達できるのはビジョンとは言わないのです。

その遠い目標を掲げて、自分で進めていく仕
組みをマネジメントシステムということを日
本に帰ってから知りました。PDCA（計画
・実行・評価・改善）とよくいうものです。

ところが日本人は、計画は立てるのですが、
振り返りをせず、やりっ放しで終わってしま
います。反省は得意なのですが、これは過去
形で語られるものです。「何がいけなかつた
か」「誰が駄目だったか」と。一方、振り返
りは、現在形か未来形です。「何があれば計
画したことができるのか」と考えて、次の計
画につなげていくことが大事なのです。これ
も二年間、試行錯誤しているうちに、自分は
このほうが進むという体験から発見しました。
大きな目標を掲げ、マネジメントシステム
を着実に回す——この両輪が必要です。

——それでもスランプはありますか？

枝廣 たしかに、進歩を感じられなくなる状
態はあって、それはつらいものです。私の場
合は、昔のノートを見て、「始めた時から見

ものを大事にできる仕事をしたいと思ひ、
少しずつ今の仕事にシフトしてきました。

——環境問題には、さまざまな問題が
ありますが、現状をどう見えていますか。

枝廣 排水などのローカルな問題も、温
暖化のようなグローバルな問題もありま
すね。そして、有害なものが間違つて外
に出て問題を起す公害や放射能などの

問題がある一方で、CO₂のように、それ自
体は有害ではないけれどもバランスを崩して
たくさんあると問題を起すものがあります。

欧米や日本では、公害のようなレベルの問
題はほとんど解決しています。発展途上国で
は、まだまだそのような問題が起りますが、
有害なものについては、それぞれの地域で手
を打つことがかなり可能です。

一方、グローバルな問題は簡単ではありま
せん。大きくは温暖化と、生物多様性の減少
という二つの問題があります。この二つは別
のもですが、つながっている部分も大きい
のです。温暖化が進むと種の絶滅が早まりま
すから。IPCC（気候変動に関する政府間
パネル）の推定によると、年一・五〜五・五
キロメートルの速さで気候帯が北に移動して



います。動物や鳥は移動できますが、植物が
種子を飛ばしたりして移動できるのは、最大
でも年に二キロといわれていて、気候変動の
速度に追いつかず、絶滅していきます。する
と、CO₂を吸収するところが減るから、ま
すます温暖化が進むという悪循環になります。
ただ、すぐに人類が絶滅するわけではあり
ません。ハリケーンや台風が強くなったり、
異常気象が続いたり、熱射病の死者が増えた
り、山火事が増えたりという感じになります。
また、日本でも昨年、温暖化対策税が導入さ
れましたが、コスト上昇につながるような、
企業のデメリットも増えてきます。

——その世界的な取り組みを、気候変動と
生物多様性の二つのCOP（枠組み条約締
約国会議）で進めようとしているのですが、

問題が起こるときは、

大事なものとつながりが

切れたときだと思ふのです。

コンセンサスが難しいようですね。

枝廣 国際社会がみんなで力を合わせ
て先に進もうという機運がなかなか生
まれないのです。気候変動では二〇一
二年にCOP18が行われましたが、C
OP15くらいからずっと同じで、先進
国は途上国に「削減しなさい」と言い、
途上国は「だったら資金を下さい」と
言うような対立から先に進めないでいま
す。ガバナンスが機能していません。

対話の力で つながりを取り戻す

枝廣 これからは、個別の企業や生活者がど
う考えて、どう動くかというところにしか頼
れない気がするのです。3・11の後は、お上
に頼らず自分で考えて選んでいく人が増えて
いることもあり、一緒に問題解決策を作るた
めの対話に力を入れています。

これまでの環境問題や社会問題は、誰かが
答えを作つて、それをどう伝えてみんなが動
かすかという考え方でした。ところが、環境
を重視しようと思うと経済に問題が出たりす
るのが現実です。そのような幸せと経済と社
会との間の問題では、誰かが解を作つて伝え
るより、みんなで折り合いをつけ、「共創」
していかねばならないのです。

それには対話の力が必要ですが、例えば原
発の問題でも、賛成派と反対派に分かれ、一

緒に話をする場がこれまではありませんでした。ですから、一緒に話をしたり、市民の前でそれぞれの意見を言ったりする場をつくっています。そのとき、声の大きな人が勝つのではなく、考えや背景や立場が違う人たちが自分にはこう見えるということを出し合って、「全体がこうだからこうしよう」と、みんなで決める。そのような対話の作法も含め、解決を共創する力を身につけることが大切ですが、——環境への思いを持つ企業が、参考にする基準のようなものはありますか。

枝廣 ESR（生態系サービス評価）^{（エコシステム・レビュイ）}というものがあります。生態系サービスとは、いわゆる「自然の恵み」のような、食料や原材料などの供給サービスのほか、水や空気をきれいにし、気候を調整したり、自然災害の被害を緩和する調整サービス、癒やしをもたらし文化的サービス、生物が生きる上で必要な基礎的環境をつくる基盤サービスがあります。そのうち供給サービスと調整サービスは、企業活動との関わりを評価するものです。

企業は生物多様性に二つの意味で関わっています。まず、どんな商品でも原材料の元をたどれば地球に「依存」しています。そこから企業が何をどのような形で作るかによって地球に「影響」を与えます。この依存と影響を数値化して分析してみると、特に依存のところでビジネスリスクがあることを発見する企業が多いですね。

例えば味の素ですが、原料にカツオを使っ

ていて大きく依存しています。ところが、調べるとカツオが世界で減ってきている。いなくなったら大変だということで、カツオの生態研究のような基礎的なところから始めて、カツオを守る研究に踏み出しているのです。

——生物多様性を守ることが暮らしや経済活動の基盤を守ることにつながるのですか。

枝廣 そうです。多様な生物がいることで、いろいろな生き物がつながり、バランスを取って、いろいろなものを生み出したり調整したりする力が発揮されます。それを守ることには、私たち人間のためでもあるのです。

例えば、防潮林も生態系サービスですが、津波が来たときに内陸の被害が違うわけです。その被害額を比べることで、調整サービスの値段を計算することができます。

あるいは、アメリカではハリケーン・カトリーナで、ニューオリンズが大きな被害を受けました。そのしばらく前に湿地を埋め立てたのですが、ハリケーンの数カ月前に生態学者たちが、湿地帯という緩衝地を失うと大きな被害が出るという声明を出していました。その予想が現実化したのです。目の前のことだけを考えると埋め立てて利用するほうがよくても、レジリアンスを失っているのです。レジリアンスとは、竹の強さを思い浮かべていただくといいのですが、強い風が吹いた重い雪が載るとしななって、風や雪がなくなると元に戻る。このしなやかに立ち戻る力のことです。多様性を減らすことは、一番レジ

リアンスにとって問題です。何かあったときに全滅になってしまうかねないからです。

3・11のときも、生産や物流がストップしましたが、あれはジャストインタイムで在庫を持たなかったり、部品の供給元が一つしかなかったりしたことで、止まったわけですね。

短い時間軸で経済効率を高めようとする、必要だけ無駄に見える中長期のしなやかな強さを損ないがちです。もう少し中長期的に物事を考える必要があると思うのですが、企業の皆さんと話をする、「乗り換える船がないので、今のやり方を続けるしかない」とおっしゃいます。しかし、余力がある間に長期的なことを考えて切り替えを図らなければ、未来世代には持続可能ではなくなってしまう。自分たちも持続可能で未来世代にも持続可能にするにはどうしたらいいか、折り合いをどこでつけるかを考えなければなりません。

問題が起こるときは、大事なものとつながりが切れたときだと思えます。地域とのつながりが切れると教育問題などが起き、地球とのつながりが切れると環境問題が起きる。私たちの活動は、本当に大事なもののつながりを取り戻すお手伝いだと思うのです。それを通じて、未来世代も含めた本当の幸せを得られる世界に少しずつ動いていける社会になるといいと思っています。

——そのためにGPI（真の進歩指標）のような新たな指標、新たな価値観も必要なのですね。本日はありがとうございました。